日蘭修好三八〇周年記念医学シンポジウム

東京会場

一六〇九年、徳川家康がオランダ総督と親書を交し、日本とオランダが正式に交易を行うようになってから、今年は三八〇周年を迎えた。これを記念して「日蘭修好三八〇周年記念医学シンポジウム」が四月十九日より二十三日まで、オランダから学者を招いて東京と大阪で開かれた。

第一日目の四月十九日は、東京の日本プレスセンターホールで歴史編として、オランダを経由してもたらされた西洋科学の日本への影響をテーマに、講演とパネルディスカッションが行われた。

午前の講演では、ライデン大学のロイエンダイク A. Leyendijk-Elshout 教授が「探求と実験・経験と理性—オランダ医学の三時代、一五〇〇年～一八〇〇年—」と題して、十六世紀にイタリアの大学を源流として始まったオランダの医学は十七世紀に最盛期を迎え、十八世紀末から指導的立場を失っていった歴史的経過を話した。

続いて、東京大学の芳賀徹教授は「西洋科学の影響を受けて日本に生まれたもの」と題し、十八世紀初めに新井白石ら幕府内での狭い周辺で行われた西洋研究が、やがて杉田玄白ら知的エリートたちの自由な研究へと広がって行き、「世界の中にある日本」という自覚を促し、幕末から明治にかけて留学や外交使節派遣など西洋に学ぶ運動へ推進する経緯を展望した。

午後のパネルディスカッションは「十七世紀以降に西洋と日本を繋いだもの」というテーマで行われた。まず司会の酒井シヅ順天堂大学助教授が、日本の科学が近代化していく過程を概説してから、オランダと日本からそれぞれ二人の医史学者が講演して討論が行われた。

ライデン大学のブーカース H. Beukers 教授はフランスとドイツの実験医学の興隆、ブールハーベェ主義から脱し切れなかったオランダの医学が国際的地位を失い、十九世紀後半にはドイツ医学の影響下に置かれてしまった状況を「実験医学を目指して」と題して述べた。

ブールハーベェ時代をオランダ科学の第一黄金時代とすると、十九世紀末から二十世紀初頭にかけてノーベル賞受賞者を生んだ頃を第二の黄金時代と位置づけて、ユトレヒト大学のスネルダール H.A.M. Snelders 教授は「オランダにおける科学的概念の受容」について話した。同教授は第二の黄金時代を迎えた理由を、オランダの科学が大学中心から研究者集団中心へと徐々に変化を遂げたためと分析している。また同教授の「オランダの科学者は新しい科学概念を海外からすばやく受容し、新しい科学の受け入れと仲介を果した」という結論は、蘭学の歴史を見るとうなずけるものである。

オランダから西洋科学を受け容れた日本の状況について吉田忠東北大学教授は、蘭学における天文、物理、化学は医学ほど水準が高くなく、翻訳した原書の大半が中学生むきの入門書が多かったと「日蘭科学交渉史—天文・物理・化学の場合—」と題して話

した。

また医学史の面から、宗田一日本医史学会常任理事は「西洋医学の受容」と題し、十六世紀後半から受け容れた西洋医学が、実用的、技術的な面であり、西洋の人文主義的思想の受容はほとんどできなかったと、日本での西洋科学受容の問題点を指摘した。

大阪会場

一日おいて二十一日から三日間、大阪ロイヤルホテルで講演とシンポジウムが行われた。二十一日は医家向けに、ロイエンダイク教授の「日蘭の医学の歴史」、藤野恒三郎大阪大学名誉教授の「医学知識の輸入・同化・発展」と題する二つの講演と、シンポジウム「代用臓器」があった。

ロイエンダイク教授は、オランダにおける医学の発展を概観し、ヨーロッパ医学史の中でのオランダ医学を位置づけ、藤野教授は、オランダを通して受け容れた西洋医学が日本でどのように発展したかを述べた。

三日目の二十二日も医家向けとし、二つのシンポジウム「医療の未来」「分子遺伝学と癌」が行われ、最終日の二十三日は公開フォーラムとして、作家吉村昭氏の講演「ペリー来航とオランダ」、ライデン大学ミュルダー J.D. Mulder 教授の講演「健康人の老化」、シンポジウム「すこやかに生きる」があった。

吉村昭氏は、国交を結ぶことを唯一の目的として来航したペリー艦隊の出現は、日本だけでなくオランダにとっても大きな衝撃であったことを史実をもとに話した。

研究者向けフォーラム

なお、第一日目と第二日目の間、四月二十日、東京の竹橋会館で科学史・医学史・洋学史等の研究者向けのパネルディスカッションが開かれた。まず日本側から矢部一郎立正大学教授が、江戸の本草学者がリンネ分類など西洋植物学などを導入し、日本に本格的な植物学が生まれていく経緯を話し、ついで蒲原宏日本医史学会常任理事が、日本に影響を与えたオランダの整形外科医の事蹟を紹介した。

その後、オランダ側から、ロイエンダイク、ブーカース、スネルダールの三氏から第一日目の講演の補足があり、昼の懇親会の後に会場からの活発な発言を混えた討論が行われた。

（蔵方　宏昌）

日本医史学会北陸支部

第一一回北陸医史学同好会総会例会

日　時　平成元年七月二十三日（日）午前一〇時から

場　所　㈶東洋医学臨床研究所　会議室

金沢市南新保町ル五三　電話〇七六二―三七―八二〇〇

会　費　二、〇〇〇円（昼食代含む）

プログラム

開　会……石川県幹事

総　会

一　阿波加脩造とその系譜……寺畑　喜朔（金　沢　市）

二　明治・大正期における石川県金澤病院精神科の看護記録に